

## 話題の飛び方に着目した脳の機能的性差が与える会話展開への影響

横澤 えりか

本研究の目的は、脳の機能的な性差と会話の展開には関係があるかを明らかにすることである。生物学的な性差とは別に、脳には機能的な性差があり、それによって思考や行動パターンに差が出ると考えられている。しかし、本研究で対象とする会話展開との関係についての研究は見当たらない。解析の結果、生物学的な性差ではなく、脳の機能的な性差が会話の展開に影響する知見が得られた。

男脳・女脳・中性脳を判定する診断テストと会話実験によって、会話の展開を解析する。本研究では、特に会話中で話題の飛び方に注目する。話題が飛ぶということは、一つの話題についての話が終わる前に次の話題へ転換することを意味し、筋道立っておらず論理的ではないと考えられる。同時に、被験者の内向性・外向性の度合いと、実験で会話をする被験者同士の親密度も計測し、それらの結果をふまえて分析結果を補正する。

事前に行った男性 26 名、女性 34 名を対象とした診断テストの結果に基づき、二人一組で行う会話実験に参加する男女 30 名と組み合わせを決定した。被験者に二種類の相談をもちかけるという設定で会話実験を行った。会話の中での話題転換表現の出現ごとに会話を区切り、そのまともり毎に会話の話題を分類した。そして、会話中に話題転換をする発言の頻度と、脱線した話題の種類の豊富さを調べるために、話題のつながりや展開を可視化し、(1) 会話内容の数、(2) 同一の脱線話題の出現率の二項目を分析した。(1) 会話内容の数は、値が高いほど話題転換表現が多く、(2) 同一の脱線話題の出現率は、値が高いほど相談内容から脱線している話題の種類が少ない。脱線話題の種類は少ない方が、脱線した話題同士がより密につながっているため、話題が飛んでいないとみなす。その結果、(1) 会話内容の数は、女脳 21、中性脳 12.38、男脳 13.4 であり有意差が見られた。数値は二種類の相談内容についてペアごとの平均値である。また、(2) 同一の脱線話題の出現率は、女脳 0.18、中性脳 0.14、男脳 0.03 であり、同様に有意差が見られた。また、親密度で補正後の結果も同様に有意差が見られた。従って、女脳の人は多く話題転換をすると同時に、同じ話題を繰り返すと言える。(2) 同一の脱線話題の出現率では、男脳が最も脱線話題の種類が多く、話題が飛ぶという結果から、男脳だと話題が飛ばないとは一概には言えないことがわかった。さらに、女脳の女性と中性脳の女性で比較したところ、女脳の女性の方が話題転換をする発言が多く、同じ話題を話すという結果が出た。このことから、会話の展開の相違は生物学的な性差ではなく、男脳・女脳・中性脳という脳の性差の影響だと考えられる。

従って、「男性は論理的に話し、女性は話が飛ぶ」は偏見であると言える。よって、「女性だから」、「男性だから」と考えるのではなく、脳の構造によって会話に違いが出るということを念頭に入れておけば、お互いにとってより良い関係を築くための第一歩となる。

(指導教員 真栄城 哲也)